

宮崎汎会員が見た世界の旅第3部歴史編第16話

ノーベル賞の国 スウェーデン

日本を代表する大企業の幹部15名で編成された経済調査団の一行は、スカンジナビア航空でヒースロー空港を離陸しスウェーデンへ向かった。機内サービスがはじまった。フライトアテンダントは色白で美人だがいずれも見上げる様な大女である。

イギリスを飛び立ち1時間、早くもスウェーデンに到着した。機内では愛想のいいサービスに頬が緩み、強いアクワビットとビールをしこたま飲み干したせいで一斉に空港トイレに駆け込んだ。出てきた面々は口々に「いやあまいった！とどかないよ」「高いね！」と苦笑いしている。要するに便器朝顔の高さが日本とはけた違いの高さなのである。スウェーデンの人たちは短足族の日本人と比べると背高足長族で皆大柄だ。一同はこの国にも子供はいるだろう、どうするのかといったかまびすしい議論で沸いた。

話は1945年に遡る。日本の無条件降伏によって第2次大戦は終息したが、敗戦国日本の世情は、それはひどいものだった。物不足は言うに及ばず食べるものにも事欠き、1億総国民はひもじさに堪え、生きることに必死であった。戦後の混乱は都会のみならず田舎町にも影を落とし暗いニュースが人々の口にのぼるたび、子供心にも何となく不安を感じたものである。そんな時打ちひしがれた日本にとびきりの明るさをもたらしたニュースがある。人々はラジオに囁り付いて実況を聴いた。かつての敵国アメリカのロスアンゼルスで“フジヤマのトビウオ”と異名をとった水泳の古橋広之進や橋爪四郎が泳ぐたびに更新する世界新記録樹立の朗報であった。

終戦から4年たった1949年、日本国中をあっと言わせたビックニュースが飛び込んで来た。ノーベル賞という世界で最も権威のある賞を、わが同胞湯川秀樹博士が受章したというのである。まわりが立ち騒ぐ中、子供心に凄い人がいるものだトワクワクしながら大人達の会話に耳をそばだてた。国中を沸かせたノーベル賞にはそんな思い出がある。

ノーベル賞は1901年に設立された賞で物理学、医学、生理学、文学、化学、平和・経済学の6つの分野で人類に大きな功績を残した人物に贈られる賞である。毎年厳重な審査を経てその年の受賞者が選ばれる。



晩餐会会場の女神像

世界で最も知られた栄誉あるノーベル賞は、1901年個人によって設立された賞である。設立したのはスウェーデン人のアルフレッド・ノーベル（1833年～1896年）である。彼はダイナマイト（ギリシャ語で力の意）など爆薬の研究開発に没頭しながら、それを生産する企業を経営し巨万の富を得た。

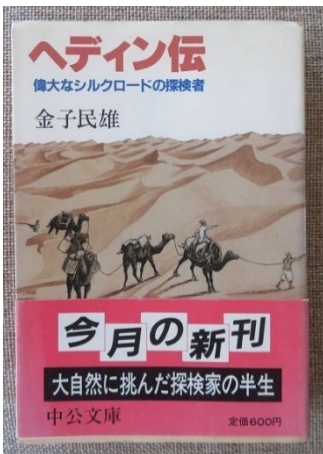
以前イブ・モンタン主演の「恐怖の報酬」という映画でニトログリセリンがいかにか危険かを知ったが、不安定で危険なニトログリセリンを安全で取り扱いやすくしたダイナマイトは画期的な発明で50カ国で特許取得した。

ノーベルは自身の巨額な財産を基金として、そこからあがる毎年の利子を人類に貢献した人達に分配したいという遺言を残した。毎年選ばれる受賞者には賞状とメダルと賞金が授与される。賞金はおよそ1億円～8千万円といわれている。因みに賞金は日本の場合非課税扱いである。金メダルはノーベルの横顔の肖像が刻み

込まれ18kで、日本人受賞者は2021年現在25名を数える。

首都ストックホルムにある重厚な市庁舎のホールで催される晩餐会の会場を見学した。ホール正面にはメーラレン湖の女王と称される女神が金色に輝く巨大なモザイクで飾られている。授賞式当日には受賞者やスウェーデン国王を囲み1300名で埋め尽くされる。

ふとスウェーデンのイメージはノーベル賞やヴァイキングだけかな？他に何か思い浮かぶかと呻吟した時、以前胸躍らせ読んだ探検家スヴェン・ヘディンの辛苦に満ちた探検記録を思い出した。



胸躍らせた探検記

ヘディン（1865年～1952年）は首都ストックホルムに生まれそして没した。ベルリン大学時代の同窓には日本でもよく知られているアフリカ探検家のシュヴァイツァーや地球物理学者で大陸漂流説を唱えたヴェゲナーなど多くの著名人たちがいて交流している。

ヘディンの研究フィールドは中央アジアが中心であった。ペルシャ、メソポタミア、ウズベキスタンのブハラやサマルカンド、タクラマカン砂漠、中国、さらにタリム盆地、チベット、カラコルム、ロシア、そしてインダス川やプラマプトラ川の水源地調査をおこなうなど命がけの探検を行い、それまで白紙であった世界地図の空白地帯を埋めていった。

探検には多額の資金が必要であるが、ノーベルや日本の大谷光瑞等が財政的援助をしている。1908年および1923年に日本にもやってきて明治天皇に拝謁しているし、1909年にはロシア皇帝ニコライ二世にも謁見している。

1923年に初めてアメリカを訪れているが、訪米中日本では関東大震災が起こり、ヘディンはアメリカ各地で講演した講演料をすべて日本への見舞金として寄付している。

1934年ヘディンはおりしも動乱の最中にあった新疆でさまよえる湖ロプノール湖の復活を自



新疆ウイグルの博物館



博物館入口の巨大な隕石

分の目で確かめた
が、その時偶然千
数百年前の墓を発
見するという幸運
に恵まれ発掘にあ
たった。そして棺
の中に眠る女性の
ミイラを発見し、
ヘディンは楼蘭ロ
ブの女王と名付け

たのである。楼蘭の美女には中国生産性調査団に参加したおり新疆ウイグル地区の粗末な博物館で
対面した。彼女は鼻すじがとおり眠れるがごとくの美女であった。賑わい栄えていた当時の楼蘭の
町の喧噪を想像しながら、しばらくそこに釘付けとなった。博物館の入口には巨大な隕石が野ざら
しで展示されていたのも強く印象に残っている。中国側の案内人は間もなく新しい建物に立てかえ
る予定だと告げた。

余談ではあるが、新大陸アメリカ発見はコロンブスといわれているが、実はコロンブスに先立つこ
と500年前にすでにヴァイキングが発見しているとスウェーデン企業の人から聞いた。史実かど
うかわからぬが興味を掻き立てられる話である。

友人に元川崎製鉄の常務を務めた男がいる。彼曰く、ノーベル賞の晩餐会のカトラリー、いわゆる
ナイフ・フォークの類は日本の燕三条の山崎金属が造り、材料のステンレスは川崎製鉄が収めたと
のこと。